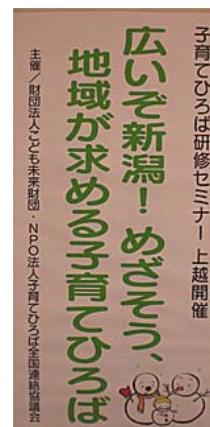


子育てひろば研修セミナー<上越開催>

テーマ『広いぞ新潟！ めざそう、地域が求める子育てひろば』

【開催概要】

開催日 平成20年12月13日(土) 10:00～16:45
会場 上越市市民プラザ(新潟県上越市土橋 1914-3)
主催 財団法人子ども未来財団・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
後援 厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会・新潟県・上越市
協力 「子育てひろば研修セミナー上越開催」実行委員会・
NPO法人マミーズ・ネット



【参加者数】152名(男性18名、女性134名)

(行政72名、NPO・任意団体49名、その他団体・企業10名、その他21名)

【プログラム趣旨】

新潟県では現在、NPOなどの民間団体、行政、保育所・幼稚園等による多様な子育てひろばが開設・運営されています。本セミナーは、地域の実情や支援ニーズに応じたひろばのあり方を考えることを目的としています。また、それぞれのひろばの特徴を活かし互いに連携し機能するためのネットワークの構築を目指します。さらに、子育て支援関係者が「出会い」「つながり」「学びあう」ことにより新たな地域子育て支援の可能性を探っていきたいと考えます。

【当日の様子】



主催者挨拶
財団法人子ども未来財団
岡林一枝さん



開催地実行委員長挨拶
NPO法人マミーズ・ネット
理事長 中條美奈子さん



司会
顔北キッズ・アンパンマン
江村奈緒美さん

■プログラム1 基調報告

「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」

厚生労働省少子化対策企画室 赤塚 孝行さん

国の子育て支援施策の現状とそのポイント、今後の方向性などについて話されました。なぜ、今「子育てひろば」が求められているのかを、豊富なデータを基にわかりやすく解説いただきました。急速な少子化を招いている社会的な要因の一つに、子育てをめぐる希望や理想と現実ギャップがあるということ、そのギャップを埋めるための方策を国をあげて取り組んでいるという言葉に心強さを感じました。地域子育て支援拠点事業は「ひろば型」「センター型」「児童館型」とそれぞれ出発点の違い、関わっている人々の思いも違うことを踏まえた上で、関係機関と連携しネットワークを作っていくことが本当の意味での拠点づくりになるという赤塚さんのお話に、会場中の参加者がこのセミナーの意義を再確認しました。



■プログラム2 パネルディスカッション

「地域のニーズにあったひろばのあり方」について

コーディネーター	金山美和子さん	長野県短期大学講師
コメンテーター	赤塚孝行さん	厚生労働省少子化対策企画室
パネリスト	関原 貢さん	新潟県児童家庭課
	奥山千鶴子さん	NPO 法人びーのびーの
	中條美奈子さん	NPO 法人マミーズ・ネット

まず、ひろばを運営されている奥山さんと中條さんからひろば開設に至るまでの経緯、ひろばの特徴などが説明されました。奥山さんは「土地に応じたひろばのあり方がある。無料のひろば、有料のひろば各々必要とされているニーズが違う」、中條さんは「当事者同士がしゃべることの大切さ、行政の子育て支援だけではカバーできないニーズを自前ひろばで展開していること」などを話されました。新潟県の関原さんからは、県の役割と取り組みについて次世代育成支援行動計画等の説明がされ、策定段階で現場のスタッフと繋がっていくことがニーズを施策に活かすために大切であるとの話ができました。続いて、継続的に関係を作るのが難しいひろば利用者のニーズを拾い上げ、運営に活かしていくためにはどういった工夫がされているのか、情報交換がされ、厚労省の赤塚さんからは、今後の展望としてひろばに自ら出て来ることができない人へのアウトリーチの必要性が話されました。

「この地域だからこそ必要」とされるニーズを把握し行政や民間を含め、多くの関係機関がうまく連携し合うことが大切であることを確認し合いました。



金山さん



関原さん



奥山さん



中條さん

■プログラム3 ランチタイム交流会

ファシリテーター 椎谷照美さん NPO法人ヒューマン・エイド22

地元のNPO法人が作ったおいしいお弁当を食べながら交流を深めました。食事の後に、本格的な交流会がスタート。生まれ月で4つの季節のグループに分かれ、自慢したい季節のイメージを模造紙に書きました。初めて出会う参加者同士でしたが、「季節自慢」を考えるうちに、緊張もほぐれ、大声で笑ったり、イスから立ち上がって指示したり、どのグループもとても白熱した様子でした。



いよいよ発表の時間。即席で審査員も登場し、新津の名産品等の景品を賭けて、各季節でプレゼンテーションをしました。参加者全員、最後はみんなが笑顔になって終わりました。笑うことで脳が活性化し、心の緊張感もほぐれて午後からの分科会も楽しく参加できたことと思います。



椎谷さん

■プログラム4 分科会

<第1分科会>

当事者の力を引き出す子育て支援とは？
～支えあう子育てをどう作っていくか～



コーディネーター

山川俊幸さん 富山県教育委員会県立学校課

パネリスト

橋 薫さん 子育て生活応援団

大塚いづみさん With:mom スマイルママネット UEDA

山縣知子さん NPO法人マミーズネット

はじめに、山川さんから「支援」と「支えあう」はどちらも「支」の字を使いますが、「支援」はベクトルが一方であるのに対し、「支えあう」は双方向を向いている、という言葉の確認がありました。「フロアの皆さんで協力し、支えあっていい分科会にしましょう」と柔

らかい雰囲気です。会が始まりました。

大塚さんは、つどいのひろばの清明子ども館が始まって8ヶ月。ひろばが情報交換の場となるように心がけている。また、利用するお母さんたちと良い関係を作っていきたい。しかし、「親を支えあう存在にしていられない」のが悩みだと話しました。山縣さんは子育てサークルで、やりたいようにやれた体験・見守ってもらえた体験をいかに、マミーズ・ネットを立ち上げたこと。それから12年、常に当事者団体として活動していることを話しました。橋さんは金沢駅「こどもらんど」や金沢市「教育プラザ富樫」の運営などに携わり、市との連携をうまくとっていること、スタッフの研修会では



山川さん



橋さん



大塚さん



山縣さん

事例報告会を実施し、失敗談などを話したり、情報を共有したりすることでとても効果があるとのことを話しました。

その後の質疑応答では、「保育士が『保育』を取り払うとは」「人材の発掘・育成方法は」「世代間や男性など、苦勞している点は」などの質問が出されました。

<第2分科会> 表面的には見えにくい特別なニーズを持つ親子をどう支えるか

コーディネーター	荻原佐知子さん	CAP・じょうえつ
助言者	五十嵐透子さん	上越教育大学大学院准教授
ファシリテーター	安達ユミ子	上越市こども福祉課若竹寮
	小池裕子	長岡子育てライン「三尺玉ネット」
	児玉久美子	NPO法人ゆめきゃんぱす
	若杉絵里子	見附市立わかば保育園・庄川保育園

日々ひろばで出会う親子の様子や行動の背景には、見えにくい特別なニーズがあるのかもしれませんが。コミュニケーション能力の問題？ネグレクト？家庭内の不和？DV？そうしたニーズにどのように気がつ

いたのか、また、どのように支えたのか、支えられなかったのか。それらをグループワークの中で、お互いの実践をもとに多くの事例を書き出すことを試みました。そこから課題を導き出し、それらを踏まえて五十嵐先生から心理学の専門分野から助言をいただきました。

「支援者は、自分の支援の仕方でのいいのかと、不安を抱えがちなので、つい、何かをしてあげなくてはならないと、評価的関わり、支持的関わりをしてしまいがちになる。しかし、対象者に働きかけを行うタイミングが重要であり、

対象者の準備状況が整っていない場合は、その働きかけは役に立たない場合が多い。実は見守り続ける、同じ態度で接し続けることがもっとも積極的な対応である」というお話をいただきました。

ワークの中で出されたたくさんの事例をみると、支援者は日常的に「あれ？少し変」と感じた違和感を大切に、どう働きかけていくかを考えてみる必要があるのだと感じました。五十嵐先生の「行動には全て必ず目的がある」というお話も印象的でした。また、参加者の積極的なワークへの参加に感謝します。



荻原さん



五十嵐さん



安達さん



小池さん



児玉さん



若杉さん

<第3分科会> 多様な養育者が過ごしやすいひろばのために

事例報告

コーディネーター 小山 清さん 上越市子育て支援課
報告者 中島 純さん NPO 法人ヒューマン・エイド 22
佐竹直子さん 長岡子育てライン「三尺玉ネット」



小山さん



中島さん



佐竹さん

中島さんからは、男性をいかにひろばに取り込むかについて、ご自身のひろば利用者から支援者への歩み、ひろばで実施している父親向けの居場所開催を紹介する中で、ひろばに男性がいることでより安心感が得られ、父親の育児に対する意識の変化にもつながることのお話がありました。佐竹さんからは、実践されている多様な事業についての紹介があり、子育て世代からアプローチできる多世代交流のかたち、多様な人が過ごしやすい場であるための取り組みが報告されました。

その後、グループワークで参加者が意見交換。多様な養育者、特に父親をいかに取り込んでいくか、それにとまなう問題点などについて話しあいました。

まとめとして、コーディネーターから「男性にとって居心地のよいひろばであるために、スタッフは男性に手伝いを頼むなど上手に利用することで、自分が必要とされている存在であることを示し、敷居を下げるのが有効であろう」とのお話がありました。最後に参加者のリクエストに応じて、中島さんから絵本の『楽し読み』を披露していただきました。



<第4分科会> 親子とのより良い関わり方を考える～表現から考える支援者の関わり方～

講師 若山 哲さん 福岡女学院講師

●表現ということ

若山さんから出されたテーマ「月」「富士山」「人」「山」「うれしい」の絵を描きました。記号化されたものは簡単に描くことができるが、感情を表す「うれしい」などのテーマは難しいと参加者から感想が出ました。それを受けて、



若山さんは、2～3才の子どもは、頭でのイメージを指先に伝えるのは難しいから、ぐちゃぐちゃとした絵をかく。だから、上手く描かせようとしなくていい。また、黒い服を着た絵を描いたら愛情不足と、支援者は捕らえがちだが、決してそんなことはない。子どもはそのままを描いただけ。大人は名画といわれるものを観たら「美しいと思わなければ」「理解しなければ」と考えてしまう。しかし、優れたもの=いいものと思わなくていいし「好きだから」で選んでいい。これを大切にしてほしいと、話をされました。



若山さん

のと思わなくていいし「好きだから」で選んでいい。これを大切にしてほしいと、話をされました。

●支援者として関わるときに

利用者との関わり方は、絵と同じで、「くっついて観る」「遠くから見る」どちらの方法も大切。また、「ひろばの質の向上」といわれるが質とは雰囲気。立派なものでなくていい。「利用者の期待に答えたい」「やらなきゃ」ではつらくなってしまふ。いろいろな人がひろばに来て、いろいろな関わり方があっていい。スタッフの「正しい関わり」というものは、ないのではないか。「ここに来たら、いいことがありそう」というひろばでいい。「こういうふうにご覧してほしいなあ」という参加者同士の関わりをコーディネートする支援者でいい、というお話がありました。

いろいろな絵があるようにひろばも、いろいろあって、みんなが楽しめたらいいということを演習を通して実感した分科会でした。

■プログラム5 全体会

報告者

- | | | |
|-------|---------|------------------|
| 第1分科会 | 山川俊幸さん | 富山県教育委員会 |
| 第2分科会 | 荻原佐知子さん | CAP・じょうえつ |
| 第3分科会 | 小山 清さん | 上越市子育て支援課 |
| 第4分科会 | 椎谷照美さん | NPO法人ヒューマン・エイド22 |



各報告者より、分科会の報告がされ、参加できなかった他の分科会の様子を知ることができました。どの分科会も限られた時間の中で、それぞれの地域の実情やニーズに応じた子育て支援について、見識を深め、学びあうことができたと感じられるものばかりでした。参加者の皆さん、登壇者の方々、スタッフ一同が日頃の活動を振り返り、地域子育て支援への思いを新たにしました。



総括 中條美奈子さん NPO法人マミーズ・ネット

「いろいろな地域で活動されている方々から直接話しを聴くことの大切さを感じた。支援者自身が幸せでないと、良い支援はできない。そのためにも、お互いを支え合うことが大事であり、今日の出会いを大切にしていきたい」と、このセミナーで得たことを今後の活動に繋げていくことを確認しました。

